

## 「戦争」は遠い昔、遠い世界のことなのか

多くの日本人は戦争体験者ではなくなっている。テレビでは「ころがってる屍体」が映る事はない。政府や放送界の方針でニッポン人は戦争のリアルな映像は見ないのだし、戦争をリアルに考えることもなくなっている。「戦争」は遠い昔、遠い世界のことなのか。「ニッポンの戦争責任」といわれるが、それは今の私たちにどんな関係があるのか。スポーツやバラエティー番組の影で、いまなお福島原発事故の放射能汚染や沖縄辺野古の基地建設が強行されていることを忘れていいだろうか。

## 過去を知ることなしに、未来を築くことはできない

2・26事件＝陸軍青年将校のクーデター未遂事件が起こった1936年は、それ以後の軍部の増長・政党政治の不安を目の当たりにしながらも、ニッポン人は阿部定事件という猟奇的なニュースに熱狂し「見ないふりをした」。翌37年、7月盧溝橋事件を起こした日本は北京から中国軍撤退（日本軍の北京駐留）を要求したが、中国が従わなかったので、暴支膺懲（ぼうしようちょう＝言うこと聞かず暴れる中国を懲らしめる）のかけ声のもと「断乎たる措置を取る」として中国への全面戦争へとなだれ込んでいき、12月の南京大虐殺へと連なっていた。南京陥落のとき日本では、中国人を大虐殺したことも知らされずに、提灯行列で祝った。過去を知ろうとしない、戦争で犠牲になった者たち（兵士も含め）のことを知らなければ、「見たくない現実」にいつか自分たちが巻き込まれてしまうことにならないだろうか。

## 天皇代替わりでも時代は変わらない

今年の戦没者追悼式で天皇は、「深い反省の上に立って、再び戦争の惨禍が繰り返されぬ」と語ったが、安倍首相は子や孫たちに謝罪し続ける「宿命を背負わせるわけにはいかない」とたびたび発言した。「戦争の責任」を「宿命」と言い代える策略に気づきたい。平和は誰かに語ってもらって終わりとする問題ではなく、自分たちで守り作り上げていく問題である。中東への自衛隊派遣が画策されている。

## 日本人が本当に関わった侵略戦争

「普通の人」が緊急動員されて上海～南京へ食糧物資補給なく激しい抵抗を経るうちに「普通に」略奪・強姦・虐殺を行うニッポン軍兵士に変貌してしまうのはなぜなのか？ 戦争をしない、残虐行為をしないという態度をニッポン人の中に作り出したい。ぜひ証言集会にご参加ください。

今年の証言集会では、三人の親族が被害にあいご自身も金陵大学で日本兵に銃剣で刺され恐怖の経験をした葛道栄さんの被害の様子をご子息の葛鳳瑾さんからお話を伺います。

また江蘇省社会科学院の孫宅巍さんから「悲壮な南京防衛戦の真相」という題で講演していただきます。ぜひ、ご参加ください。

